

レセプトによる情報の非対称性の緩和可能性

遠山正朗
埼玉工業大学

本研究の目的は、組織経済論の視点から医療に伴う情報の非対称性に接近し、レセプトが経済主体にとって意思決定に寄与する情報となる可能性について検討することである。レセプトは間接的に医療に伴う経済的な情報を包含しているが、現状でこれが経済主体の意思決定に介在しているわけではない。そこで、この本質が医療というサービスに特有であるのか示したうえで、レセプトが意思決定に寄与する可能性について検討する。本研究においては、組織経済論のうち、とりわけプリンシパル・エージェント理論と取引コスト理論の視点から接近するが、本研究の主題となっている情報の非対称性は、プリンシパル・エージェント理論の影響変数にほかならない。プリンシパル・エージェント理論は、情報の非対称性が生じる当事者間の関係、すなわち、プリンシパルとエージェントとの関係を研究対象にしており、医療においては、プリンシパルである患者とエージェントである医師との関係において、典型的にプリンシパルとエージェントとの関係を見出すことができる。情報の非対称性は、エージェント・コストを最小化するに際して障害となるため、情報の非対称性を緩和することが求められる。しかしながら、医療に伴う専門性は、情報の非対称性の緩和を困難にさせるものであり、このことについてさらに取引コスト理論から接近するならば、その影響変数である不確実性・複雑性を介して接近することになる。これらの視点を通じて、情報の非対称性を緩和するものとしてのレセプトの可能性を検討する。

主要参考文献

- 1) 遠山正朗 (2002) 『情報通信技術と取引コスト理論』 白桃書房。
- 2) 遠山正朗 (2007) 「医療におけるプリンシパルとエージェントに関する一考察—組織の経済理論からのアプローチ—」 『医療福祉研究』 創刊号, 31-39 頁。
- 3) Toyama, M. (2007), A Transaction Cost Approach to the Effects of Network Growth on Cost and Price, *Contemporary Management Research*, 3(1), 71-81.